

An illustration of two Franciscan friars in brown robes and hoods, walking through a hilly landscape. The friar on the left has a halo and holds a staff, with his right hand raised in a gesture of blessing or teaching. The friar on the right also holds a staff and gestures with his left hand. The background shows rolling hills, trees, and a winding path under a warm, golden light.

小さき兄弟会 (OFM)

行って、告げなさい ...

小さき兄弟会における生活とミッションの
新しいあり方のガイドライン

改訂版 2017

小さき兄弟会
行って、告げなさい...

小さき兄弟会における
生活とミッションの
新しいあり方のガイドライン

ローマ

2014 年復活祭
2017 年 1 月新版

「それゆえ、すべての兄弟よ、わたしたちは、
褒美や日雇い仕事、または援助という口実のもとに、
わたしたちの精神と心を失って、主から遠ざからないよう、
わたしたち自身を注意深く守らなければなりません。

神は愛であり、その聖なる愛において、
わたしはすべての兄弟に、管区長たちにも
他の兄弟たちにも、願います。

あらゆる妨げを遠ざけ、あらゆる心配と心づかいを脇に置いて、
できるだけ完全に、清い心と純粋な精神をもって、
神である主に仕え、主を愛し、尊び、礼拝するように努めなさい。
主ご自身がこれをすべてに越えて求めておられるのです。

そして、全能の神である主、父と子と聖霊のための
永遠の幕屋と住まいを、
わたしたちの内に常に建てましょう」。

(聖フランシスコ「非裁可会則」22章25～27節)

前 置 き

最も親愛なる兄弟たち、
主が皆さんに平和を与えてくださいますように！

「行って、告げなさい...」(*Ite, nuntiate...*) : 復活した主イエスが、マグダラのマリアともう一人のマリアに向けて語られたと聖マタイが福音書で伝えるこのことばは(マタイ 28・10)、今日もなお、空になった墓から響き続け、**兄弟**であり**より小さい者**であるわたしたちに、福音的召命の賜物に新たな確信を持って応えるよう、力強く呼びかけています。「行って、告げるように」との招きは、わたしたちの中に活力と力、責務と創造性を引き起こしながら、わたしたちの生活に、彼と共なる復活を授けます。

この喜びと聖なる新しさの精神をもって、皆さんにこの小冊子をお届けします。これは福音宣教総本部事務局が皆さんすべてにお渡ししたい **生活とミッションの新しいあり方** についてのガイドラインです。この **新しいあり方** は、わたしたちの召命を主からの賜物として受けとめるものであり、本会が今日の世界にその存在を再活性化する責務を実践において表現するものです。

この小冊子の意図は、この **新しいあり方** を、すべての兄弟により多くまたより良く伝え、知ってもらうためです。しかし、とりわけ、委ねられた兄弟のひらめきを識別し、励まし、新しい兄弟共同体の建設に寄り添って、彼らを後援する管区長や分管区長に向けられています。このガイドラインは、皆さん、特に、**生活とミッションの新しいあり方** を生きるよう靈感を受けた親愛なる兄弟たちに、支えと共感と、皆さんの心のうちに燃えているものを具体化する上で指針となる基準を提供するためのものです。

福音宣教総本部事務局とこの小冊子を準備した委員会のメンバー：
兄弟マッシモ・テドルディ、兄弟アルトゥーロ・リオス・ララ、兄弟ア

ドリアーノ・ブサット、兄弟マリオ・ヴァッカーリ、兄弟ヤコポ・ポツツェルレ、兄弟ジャック・ジョエー、そして草稿準備や制作に携わったすべての方々に心からの感謝を表したいと思います。また、翻訳者たちのおかげで、この小冊子が本会の三つの公式言語だけでなく、フランス語、ポルトガル語、ドイツ語、ポーランド語、クロアチア語でも出版されることに感謝します。

本会内部において、様々な **生活とミッションの新しいあり方** が、かなりの準備と経験の歩みを進めたことは、明白で揺るがない事実です。会憲（第 115 条 2 項）によって切望された、わたしたちのアイデンティティーとカリスマの新鮮さに「肉付けを行う」ことは、2009 年の総集会によって確信を持って約束されてきました（主のみ言葉を全世界に宣べ伝える、指令 n. 20）。

このガイドラインを皆さんにお渡しするにあたり、わたしは皆さんのすべて、親愛なる小さき兄弟たちに、教皇フランシスコを情熱と熱意をもって見つめるよう求めます。なぜなら、真の **新しい福音宣教者** である教皇に導かれて、わたしたちは、より貧しい者たちと「社会の周辺部」に生きる人々に奉仕するための、教会と世界におけるわたしたちの生活とミッションにとっての常に刷新された福音的様式に出会うことができるからです。

「今おられ、かつておられ、やがて来られる方、万物の支配者」（黙示 1・8）の後に従うこの歩みにおいて、イエス・キリストの貧しい御母と熾天使的師父聖フランシスコが、わたしたちに同伴し、支え、わたしたちのために執り成してくださいますように。

ローマ、2014年4月20日

復活の過越祭

兄弟愛のうちに

兄弟 マイケル・アントニー・ペリー

総 長

Prot. 104706

序 文

この小冊子は世間での生活から生まれたものです。手によってよりも、足によって書かれたものと言うことができるでしょう.... 外に出かけていく人の足、十字架に付けられた方からの命令を聞いた人の足：「フランシスコよ、行きなさい！」、そしてハンセン病者の助けを求める声：「フランシスコよ、来てください！」。多くの著者たち、兄弟たちの足で書かれています。彼らはわたしたちの美しく、完全ではありませんが、あまりにもしばしば忘れてしまわれた、多くの文書の正統性を確かなものにしようと努めました.... これらの足は、理論から実践へ、紙の上から具体的な取り組みへの移行をもたらしました。彼らは思い切って行いました。彼らの足は、善と平和の知らせをもたらすために、現代世界のほこりまみれの道で汚れました。足で出かけたこれらの兄弟たちは、すべて者に心をとらえる光景を差し出します：小さな修道院の囲いを越え出て、世界という大きな回廊を歩むのは素晴らしいことです！それは、出会い、学び、告げ知らせるため、そしてとりわけ、人々と共に過ごすため.... 武器を持たない取るに足りない者の手で、わたしたちの町に、地区に住み、意味を求め、生命を求めている人々の身体に、触れるため。教皇フランシスコの確信：「他の人と結ばれるために、自分自身を出て行くことはとてもよいことです」（『福音の喜び』、n. 87）を分かち合うのは善いことです。他者との出会いに赴くことは、人となられた善であるキリストの方に進むことだからです。

まさにこれらの兄弟たちこそが、二重の目的をもってこのガイドラインを書きました。それは、わたしたちに与えられたカリスマの永遠に新鮮な泉から水を飲むように世界中の兄弟会全体に呼びかけることと、写真に写すかのように、これまでに繰り広げられた歩みの概略を示すことによって、わたしたちを麻痺させ、閉じ込める、裕福さによる無反応を払い落とすことです。この歩みは、多くの喜びと労苦、試みと、聖霊の力によって可能となった善い結果を生み出しました。

それゆえ、このガイドラインは、率直に言って次のようなものです：

- これは、生活とミッションの **新しいあり方** の簡単な歴史の分かち合い、つまり、主からの息吹と兄弟の応答、そして管区長たちによる識別との間の絡み合いが感知される歴史です。
- これは、個人としてまた共同体としての生活の刷新と、そのカリスマを人々が話す日常の言語に翻訳する努力への関わりにおいて、フランスカン・カリスマの美しさを、深い願望と関わりをもって生きをを求める者たちの経験から生まれた、いくつかの指針です。
- これは、生活とミッションの **新しいあり方** の基礎となる要素について提起する要約であり、時折、競合的で闘争的でさえある「内的な」(*ad intra*) 動きと「外的な」(*ad extra*) 動きとの間、神に向かって登り、兄弟姉妹たちに向かって降りていく坂道の、日々の歩みから生じる要約です。
- これは、現代世界の決して一様でない文脈において、**新しいあり方** が採用する数多くの表現の中からの実例を紹介するものです。御自分の手で創造されたすべての被造物と世界を愛する、唯一の主の御顔の様々な表出です。
- これは、**新しいあり方** と管区の活動との間の関係を、とりわけ、同伴の歩みと評価を要する養成の局面に関して、建設的に生きるための兄弟的な、ささやかな提案です。

キリストの肢体を単に言語で語り尽くそうとする広まった危機を前にして、今日、御摂理がわたしたちに場を与えた歴史と地理において、**肉となられたみことば** の具体性、絶え間なく肉となり続ける **みことば** の具体性を信じているこれらの兄弟たちに、わたしたちのすべてが感謝しています。

新しい生き方の魅力は、わたしたちにとって強力な磁石に変わります。「新しさ」は小さき兄弟会の「アイデンティティー」そのものであることを、わたしたちに思い起こさせます。わたしたちのうちに神の聖霊の「新しさ」が押し入るときに、わたしたちは本当の意味で、わたしたち自身となります。

復活された方の新しい生命に、わたしたちのすべてと一緒に、この「新しいあり方」の歩みを委ねましょう。それは、すべてのもののうちに、そしてわたしたちの兄弟共同体のすべてのうちに、新しい生命の **アレルヤ!** を響き渡らせるためです！

わたしたちには今や、教皇ヨハネ 23 世と教皇ヨハネ・パウロ 2 世という、二人の新しい聖人がいます。彼らが、「全能の神・主である方のための住まい、永遠に留まるところを、わたしたちのうちに」（聖フランシスコ）築き上げるための同伴してくれますように。それは、慈しみ深く、常に素晴らしく新しい、神の御顔を見出すために、すべての者が入り、住まうことができる家です！

ローマ、2014 年 4 月 27 日
復活節第二主日 あるいは
神のいつくしみの主日

兄弟 マッシモ・テドルディ
福音宣教担当総本部事務局長

1. 新しいぶどう酒は新しい革袋に

「すべての人をよく思い出しましょう。

具体的ないのちのあかしなしには、
イエスの福音を告げ知らせることはできません。

わたしたちに耳を傾け、わたしたちを見る者は、
わたしたちの行動に、わたしたちの口から出ることを聞き、
神に栄光を捧げます！

わたしの脳裏には今、
アシジの聖フランシスコが兄弟たちに与えたものが浮かびます。
福音を説きなさい、必要であれば、ことばによっても。
生きざまをもって説くこと、つまり、あかしです。

信者たちと牧者たちとの間、言うことと行うことの間、
ことばと生きざまとの間の矛盾は、
教会の信頼性を脅かします」。

(教皇フランシスコ、「説教」：サンパウロ・フオリ・デ・ムーラ大聖堂、
2013年4月14日)

1.1. 最近におけるわたしたちの歴史の概観

「現代人は、教師の言うことよりも、あかしをする人の言葉を喜んで聞きます。教師の言うことを聞くときは、教師があかしをする人だからです」
(パウロ 6 世、「福音宣教」、n. 41)。

公会議後の刷新によってしるされた時代は、わたしたちの修道会に、構成、所在、生活様式と意図の型における、新しい兄弟共同体の発生を見ました。わたしたちの起源により忠実であり、教会と世界の期待に応えるために、より真正な福音的生活への強い呼びかけを感じました。1960 年から 1980 年にかけての「小共同体」の動きが誕生したのも、この状況においてでした¹。生きるべき福音的価値を内包する生活設計の選択は、自分の労働を維持し、最も貧しく抑圧された人々からはじまる、すべての人の生活を分かち合うために、大修道院構造からの脱出をもたらしました。この運動はさまざまな試みを生じさせましたが、そのほとんどは数年後に終了してしまいました。実践において、これらのプロジェクトの完全な実現を妨げる沢山の障害がありました。動機があまりにも理想主義的であったり、イデオロギー的であったりして、毎日の兄弟的生活の配慮と祈りの生活との間の健全な緊張関係を保つ上での困難がありました。一方に祈りの生活、他方では外部からの責務、特に仕事（多くの場合、賃金を受けるもの）との緊張です。

最近 20 年間に於いて、この模索が続行され、新しい成果が産み出されました。今では、社会学的な「てらい」とかイデオロギーに陥る危険からより自由になって、わたしたちの同時代人に御国のしるしとあかし人になり得るような、根本的に福音的な生活に焦点を当てるような歩みになりました。教会と本会の文書に促されて、真の福音宣教的ミッションのすべてにとっての源泉である、小ささにおける兄弟的

(1) タデエ・マトゥーラ、「アシジ・セミナーでの報告」（2006 年 3 月 20 日～24 日）：*"Dalla Porziunncola all'Europa: nuovi cammini francescani"* 参照。

生活を忘れることなく、事業計画の中心的動機は福音宣教の方向に移りました。それは、わたしたちが生きている時代（ポストモダン）の

根本的な新しさ、特にヨーロッパ大陸では、多くの文化的枠組みが深く変質し、わたしたちに新しい問題を提示し、わたしたちを未だ出されていない総合へと至らしめました。他方では、これまでわたしたちの生活様式を表現しようとしてきた用語、象徴、場所や話法が、もはや適切ではないことが明白に認識されました。わたしたちの生活様式がしるしとなり預言的であり得るために、透明性、明白性、そして福音化する力を取り戻すために、カリスマをますます意義深いものとする責任が感じられました。

多くの兄弟たちが、この間に生活する機会を得た経験を通して、主の霊は彼らを新しい感受性、思考方法、そして大胆さにおける新たな方法に導きました。数多くの兄弟たちはさらに、**新しいあり方**に彼らの奉獻生活の刷新と再活性化への願望への具体的な応答を見出し、わたしたちの主イエス・キリストの後に従う、個人としてまた共同体での霊的な歩みにある、わたしたちの「歴史的」構造に起因した困難と不便さに、しばしば取り組みました。

新しいあり方への探求に深く刻まれた経験の一つは、旅する（修道院の外での）生活でした。旅する兄弟共同体は、徹底的に福音を生きるため、また現代人に御国の価値のしるし、及びあかしとなるための具体的なやり方です。それは、「『キリストの生活様式』 (*Christi vivendi forma*) をあかしするために、期間を交互にして、祈りに生き、金銭を持たず、定まった住居なしに、托鉢において生きるフランシスカン生活の一側面を再現するものです」²。

それはまさに、福音宣教総事務局長が招いた、ローマへの道（2005年2月）への、旅するミッションの後での検証の集いにおいてです。そこには、招来に可能な歩みの模索を分かち合い、励ますた

(2) 「往訪の福音宣教する兄弟共同体」のプロジェクトについては、小さき兄弟会総本部、「『時のしるし』から『しるしの時』へ：証言集」 (*Dai Segni dei Tempi al Tempo dei Segni. Testimonianze*: 2002年)、n. 30-34を参照。

めのヨーロッパ会議を生み出した、福音宣教総本部事務局長が招かれました。そこでの最初の会議の後、**新しいあり方** についての省察に貴重な貢献をした、いくつかの会議が執り行われました³。セミナー形式で行われたこれらの「集会」(*meeting*)の主な恵みは、「小さき兄弟会」の外において経験されたものを含めて、さまざまな体験を分かち合うことでした。いろいろな生活様式の体験の比較から、それらの「最大公約数」を突き止めることができました。つまり、さまざまな兄弟的現実において確認できる「新しさ」を構成するものの特徴です。さらに、兄弟的生活と個人の生活計画との間の必然的な緊張を生きることへの具体的な応答を検討するために、これらの経験の特異性から出発したことも重要です。つまり「共同体内の生活」(*ad intra*)と「対外的な生活」(*ad extra*)；生活の新しさと伝統的な兄弟共同体；さらに個々の兄弟が持つ管区での役割と兄弟的生活の計画との間の緊張です。会議から浮かび上がった、うまくいった経験の中に、草の根的な拠点と本会の統治組織との協力関係を指摘しましょう。このような出会いは、実際、福音宣教総事務局(SGME)によって組織され、本当にさまざまな経験を持つ兄弟たちの他に、総長である兄弟 ホセ・R・カルバリョ、及び何人かの総理事が常に参加しました。種々のセミナーは、本会のすべての兄弟たちに、**新しいあり方**の精神と意義を理解させるのにとっても有用な、小さな道具を生みだしました⁴。それらは、最終メッセージにおいて、管区と管区合同の段階(近隣管区間の協力)、管区長協議会、そして、ヨーロッパへの注目(特に実践面においてこのテーマは、さらに発展されるべきものです)を考慮に入れました。セミナーの好結果の中に、さらに、さまざまな管区に

(3) 第1回セミナー、アシジ、2006年3月20日～24日；第2回セミナー、フラスカーティ(ローマ)、2009年1月7日～10日；第3回セミナー、サッソーネ(ローマ)、2011年5月2日～6日；第4回セミナー、グレッチオ、2013年3月4日～8日。

(4) 資料：「ポルチウンコラからヨーロッパへ」(*"Dalla Porziuncola all'Europa"*、2006年)、「ヨーロッパにおける新しいフランシスカンの歩み」(*"Nuovi cammini francescani in Europa"*、2009年)。さらに、「第3回福音宣教の新しいあり方と新しい兄弟共同体についてのヨーロッパ会議」(*"III Incontro Europeo sulle nuove forme di evangelizzazione e nuove fraternità"*、サッソーネ[ローマ]2011年)の文書を参照

所属する兄弟たちと共に「新しさ」を生きること、及びプロジェクトと **新しいあり方** を体験したいと望む兄弟たちの「夢」を受け入れ、助け、方向付ける目的で、総長からの派遣のもとに、パレスチナでのヨーロッパ人宣教兄弟共同体プロジェクトが誕生したことを指摘しましょう。

会議の進行に従い、わたしたちの召命は、賜物であって、最終的に、誰かによって取得されるか、引きはがされる権利などではないことがより明白になりました。それは、通常の状態では、兄弟共同体において、またわたしたちの管区の通常の場合において開花し得る賜物です。この賜物を、大きな言行一致への呼びかけとして受け入れ、これを実現させる主役が、わたしたちの内に働く、「主の霊の聖なる働き」⁵ であることを認めましょう。

最近では教会の教導職も、これまで着手してきた、わたしたちの生活刷新への歩みを続行するよう励ましているようです。「家庭が、その起源における生命の聖性の守り手であるように、奉獻生活は、キリストとの同形化に召された者として、究極的、完全、根本的な意味での、生命の守り手です」⁶。「何物も自己のものとせずに」(*sine proprio*) 生きることが誓願表明した者にとって、唯一必要なことは、まさに福音を生きることです。この賜物は、わたしたちの願望と計画よりも常に大きく現れます。

(5) 聖フランシスコ、「裁可された会則」第五章参照。

(6) 「奉獻生活者のあかしは、世界代表司教会議が認めるように、内在的に終末論的な意味を持っています。奉獻生活者である皆さんは、『地上の生活後の観点から見た人間存在の意味』をあかしする者であり、皆さんの生涯は、『清貧、貞潔、従順の実践において、全面的に彼（主）に奉獻されて、この世の善のすべてが相対的なものとされる来たるべき世のしるしとなります』」。新福音宣教についての世界代表司教会議「神の民へのメッセージ」（2012年10月26日、n. 7）を引用した、「第17回世界奉獻生活日へのイタリア司教団メッセージ」（2013年2月2日）を参照。

1.2. 「新しい」 ... どの意味において、そして、なぜ？

「新しい福音宣教が必要です。

その熱意において、その方法において、その表現において新しいものです」

（聖ヨハネ・パウロ 2 世、「第 19 回ラテン・アメリカ司教協議会総会での教話」、1983 年 3 月 9 日、n. 3）。

「新しい」という語は、この何十年かの間、しばしば演説や一般的な教話の中で繰り返されています。すでに第 2 バチカン公会議は、教会と現代世界との間の関係を刷新する熱意を燃やして、「新たな問題に、新たな応答」を与えること、「物事を提示するのに新しい方法に訴えること」⁷、このようにして、「新しいキリスト教的ヒューマニズム」⁸ に到達することを決意し、霊的刷新と現代に適応する二重の動きにおいて、すべての教会刷新の模範となることを示しました⁹。その後続く教導職の文書類は、「新しさ」¹⁰ の線を続行し、ヨハネ・パウロ 2 世の有名な言い回しに至りました。それによれば、今日の福音宣教は、「その熱意、その方法、その表現において新しく」¹¹ なければなりません。より最近では、ベネディクト 16 世が、教皇庁にこのための新しい管轄部門¹² を設置するだけでなく、世界代表司教会議が新福音宣教を集中的に扱うことを望みました。その最終メッセージは、すべての福音宣教にとっての必須のガイドラインとして、「内

（7）教皇ヨハネ 23 世、「公会議開催の教話」（“*Gaudet mater ecclesia*”: 1963 年 10 月 11 日）。この教話は、「新しい時代を示すもの」とされました。

（8）教皇パウロ 6 世、「公会議終結の教話」、1965 年 12 月 7 日。

（9）「修道生活刷新・適応教令」、n. 2 が明白に示すように、「修道生活の刷新・適応は、キリスト信者のあらゆる生活形態の源泉ならびに会の原初の精神にたえず立ち帰ることと同時に、会を変化した時代の状況に適応させることを含むものである」

（10）教皇ヨハネ・パウロ 2 世、「奉獻生活」（1996 年 3 月 25 日）は、「現代世界の新たな問題に対して新しい答えを出す」こと、そして「今日の状況に合った福音宣教の新しい計画を練り上げる」（n. 73）ことを語ります。

（11）教皇ヨハネ・パウロ 2 世、「第 19 回ラテン・アメリカ司教協議会総会での教話」、ポート・オー・プリンス、1983 年 3 月 9 日、n. 3。

（12）教皇ベネディクト 16 世、自発教令：“*Ubicumque et semper*”、2010 年 9 月 21 日。これにより、新福音宣教促進のための教皇庁評議会を設立。

部的な」(*ad intra*) 霊的刷新と、「外部への」(*ad extra*) 説教という二つの構成要素を提示しました¹³。

実際に、この何十年かで広く語られた「新しさ」は、すべてのキリスト教生活の特徴づけるものです。それは絶えざる回心の結果であり、主を迎え入れ、わたしたちと一緒に時代を歩む兄弟・姉妹たちを、より完全に受け入れるために、わたしたちを心においても関係においても新しくします。新しさとは、まさに「すべてを新しくする」¹⁴と断言された師の学び舎に入った忠実な弟子となることであり、「あなたがたは...と命じられている」から、「しかし、わたしはあなたがたに言う」¹⁵に移行させる力強い原動力なのです。新しさの内的な次元と外的な次元は、根と果実のように、不可分なのです。このように、心の変化は、兄弟共同体内においても、また司牧活動においても、わたしたちの他者との生活を形成する、関係とわざを新しく装わせることとなります。

「新しさ」は、それが本物であるために、その遺産の豊かさを持つ過去と、現在において既に察知される多くの変革をもたらす未来との相互作用を要求します。新しさは、それゆえ、記念と預言、源泉に立ち戻ることと未来へのあこがれと最終的な目的地への展望を結び合わせます（このため、わたしたちを取り巻く現実は、伝統的に「最新の」と特徴づけられます）。わたしたちは公会議後の年月から、他方を不利にして一つの次元を孤立させることがどれほど危険であるかを目撃してきました。それは、一方で過去への考古学的で自己参照的な回帰の危険、他方では、キリスト教生活の根源を根こそぎしてしまうほど不賢明な過去の破棄でした。バランスを保つことこそ、主ご自身がご自分について語るときに、示されたものです。「『わたしはアルファであり、オメガである』。今もおられ、前にもおられ、やがて来られ

(13) 第12回世界代表司教会議通常総会、2012年10月7日～28日、「神の民へのメッセージ」、n. 2:「社会的、文化的、経済的、政治的そして宗教的環境の変化は、わたしたちに何らかの新しいものを呼びかけます。共同体においてわたしたちの信仰を生き抜くことと刷新された方法で説くことです」。

(14) 「見よ、わたしは万物を新しくする」(黙示 21:5)。

(15) マタイ 5:21, 27～28, 33～34, 38～39, 43～44。

る方」(黙示 1・8)。わたしたちはキリストを身に着けなければなりません。「新しい人を身にまとう」(エフェソ 1・24。コロサイ 3・10 参照)。こうした方法での「新しさ」の到来は、アルファとオメガの間、始まりと終わりの間、記念と預言の間の、調和のとれた躍動です。

「新しさ」の探求における教会の歩みは、わたしたちの会憲や本会の文書にとっても明白です¹⁶。わたしたちの兄弟共同体において、生活とミッションの **新しいあり方** という表現は¹⁷、常に、内的な刷新、日々の回心、「内部における」(*ad intra*) 兄弟的生活が、歴史上の今日、「受肉し」、「地域に溶け込んだ」福音宣教のミッションから決して分離されないことを意味します。聖フランシスコの「償いをする」¹⁸ ことは、彼にどこに知らせをもたらすのかを見るための新しい眼を与え、ハンセン病者や当時の貧しい人々から始めて、神を見失った哀れな人々や現に生活財に事欠く人々、すべての人を受け入れるための新しい心を常に授けました。**新しいあり方** は、兄弟的生活に特別の光をあてています。兄弟的生活は「福音への第一にして、優れて明らかなあかしであり」¹⁹、それゆえ、「福音宣教のはじめであり、第一の方法」²⁰ なのです。福音が明白に見えるものとなるために、彼らは兄弟共同体の内に、祈りと献身の精神を守り、小ささの様式と福音を告げ知らせる情熱に生きながら、真の深い兄弟的絆を構築することを望んでいます。この土台の上でのみ、「新しいあり方」の福音宣教者的ミッションは新しいものであることができ、内部に生きるものを外部に告げ知らせる時にのみ、刷新への確固とした土台を見出すこ

(16) 小さき兄弟会、「会憲」、第 115 条 2 項：「福音宣教のつとめを果たす上でわたしたちの兄弟会が預言者的なものとなるために、兄弟たちは、教会の意向に従い、兄弟共同体生活との調和を保ちながら、新しい方法でフランシスカン・カリスマを生きるように心がける」。2009 年の総会文書は、「指令」n. 20 において、「新たな試み」を切望しています。

(17) この兄弟共同体を示すために、以下の表現が使用されています：「新しいあり方」、「生活と使命の新しいあり方」、「兄弟的生活と福音宣教の新しいあり方」、「ミッションにおける新しい兄弟共同体」、「地域に溶け込んだ兄弟共同体」。

(18) 聖フランシスコ、「遺言」、n. 1。

(19) 小さき兄弟会、「会憲」、第 87 条 2 項。同第 84 条参照。

(20) 小さき兄弟会「会憲」、第 89 条 1 項。小さき兄弟会 2009 年総集会、「総括文書」、n. 27：「福音化するのには常に兄弟共同体なのです」参照。また、n. 28 も参照。

とができると言えます。この刷新の歩みのすべてにおいて、生涯養成は福音的生活の新しさへの絶えざる呼びかけと励ましとして活用すべき、格別の重要性を帯びます。

その「外部に向かう」(*ad extra*) 次元において、ミッションのさまざまな「新しいあり方」は、現代の人々が生活しているところに緊急に届けなければならない多岐にわたる応答です。すべての者の近く、とりわけ無視された者の近くに動くこと；十字架に付けられた方が今日、わたしたちに繰り返す「フランシスコよ、行きなさい！」を行動に移し、そして同時に、「フランシスコよ、来てください！」と訴える兄弟や姉妹たちの声を感じ取ることができるために、耳を鋭敏にすること；どこにおいも、新しい天と地を準備する希望と渴望を広く播くこと²¹。これは、福音を現代の言葉づかいで紹介する福音的感受性を含みます；これは、しばしばわたしたちの歩みを抑制する構造を再検討する勇気を要求します；これは、霊の新しさに生きる人に典型的な、敢えて行うことです。

新たに現れる「時のしるし」に伴う、社会や教会の状況の変化において²²、たとえ新しいものが今日優先されるにもかかわらず、「新しい」という語は、福音宣教の伝統的形態に対置されるのではなく、むしろ、補完するもの、「と共に」(*et*)の論理にあります²³。教会の二千年に及ぶ歴史は、福音宣教的ミッションが常に、「歴史の中で、場所と状況と歴史的時期に従った『常に新しい形態と様式』を身に帯

(21) 「新しい天と新しい地」(2ペトロ3:13)；「わたしは新しい天と新しい地を見た」(黙示21:1)。

(22) 小さき兄弟会 2009 年総集会、「指令」、n. 20：「通常の福音宣教活動を放棄することなく、新たな試みが奨励されるべきである」。

(23) 小さき兄弟会 2009 年総集会、「総括文書」、n. 17：「多くの兄弟が関わっている『人々の間にある』(*inter gentes*) 福音宣教の形態の一つは、『伝統的』な福音宣教と呼ばれるもので、しきたりを守りながらも、新しい形態の福音宣教を決して排除したり、それに反発したりしないものです」。

びた」²⁴ ことを示しています。この声明は、絶えざる刷新へのさらなる推進力をわたしたちに与えます²⁵。

生活とミッションの **新しいあり方** は、常に新鮮で新しい源泉を再び採り上げようとします。それは「新しい人」²⁶ であり、未来の人である聖フランシスコの原初のカリスマを吸収するためです。その源泉は、わたしたちを鼓舞し、活気づけ、わたしたちに物事を行う新しいやり方、福音宣教の新しい模範と様式、宣教へ新たな戦略を開発できるようにします。

本会が再構築とその難局にあるこの歴史的時点において、次のことを常に思い出さなければなりません：「再編成は、もしそれが新しい必要、特に最も見捨てられ忘れられた場所から来るものに応えるための新しい存在に、たとえ少人数であっても、しるしを掲げるものであれば、創造的で預言的示唆の源となるでしょう」²⁷。

(24) 教皇ベネディクト 16 世、自発教令："*Ubicumque et semper*"。これによって新福音宣教促進のための教皇庁評議会が設立されました。

(25) 同じく第二バチカン公会議の「修道生活の刷新・適応に関する教令」(PC, n. 13) が示すように、清貧の誓願は、「必要ならば新しい形で表現される必要がある」。

(26) チェラノのトマス「聖フランシスコの奇跡」(第三伝記)、1 : 1。聖ボナベントウラ「アシジの聖フランシスコ大伝記」、12 : 8。

(27) 奉献・使徒的生活会省、「共同体における兄弟的生活」、1994 年、n. 67。教皇ベネディクト 16 世、「謁見」(2010 年 1 月 13 日)：「今日もまた、『存在すること』よりもしばしば、『所有すること』が優越する社会にあって、勇気ある選択によって、信徒が提供する清貧と連帯の模範に、わたしたちは敏感になっています。今日もまた、おなじような企画に事欠きません。福音の新しさから現実に出発し、徹底性をもって今日においてそれを生き、隣人に仕えるために神の御手に身を委ねる動きです。世界は、パウロ 6 世が使徒的勧告『福音宣教』において思い出させたように、教師があかし人であるときにのみ、教師に喜んで聞きます。これこそ、福音の流布のわざにおいて、決して忘れるべきではない教訓です。告げ知らせることを、まずもって自ら生きること、神の愛の鏡であることです」。

2. 生活とミッションの「新しいあり方」

「主がこの聖域に立ち入る自由をわたしたちに与えてくださるとは、
何としたことでしょう。
そこは、主が祭司として、わたしたちが御父に願うことはなんでも、
わたしたちに与えてくださるよう、
ご自分の名によって取り次いでくださいます。
しかし、わたしたちにもう一つの『聖域』に赴く勇気を与えてくださいます。
それは、困窮したわたしたちの兄弟・姉妹の苦悩であり、
彼らは苦しみに耐え、十字架を担い続け、イエスが打ち勝ったようには
未だ克服できないでいます」
(教皇フランシスコ、「説教」、聖マルタ教会、2013年5月11日)。

2.1. 共通のアイデンティティーに向かって。ガイドライン

「わたしの前任者たちの懸案の責任を担い、相応しい応答を行うことが時宜を得ていると思います。それは、教会全体が、聖霊の力によって再生されるにまかせ、新しい福音宣教を推進できる宣教者の勢いをもって、現代世界に現れるようになるためです」(教皇ベネディクト16世、使徒的自発書簡：*"Ubicumque et semper"*：2010年9月21日。これにより、「教皇庁新福音宣教評議会」を設立)。

セミナーと集会の過程を通して、**新しいあり方**の基本的要素がより明らかとなり、これらの要素を組み合わせる調和の必要性だけでなく、要素間の優先順位が明らかとなりました。2009年のフラスカーティーでのセミナーにおいて、兄弟たちは、福音宣教者的存在の「新しいあり方」を開始するに本質的な基準に関して合意しました。続く何年かの間に、それらの基準は、その有効性を確認されただけでなく、

個々の兄弟共同体においても、また集会や上記に挙げられた一連のセミナーにおいても、さらなる深化を遂げました。

2009 年総集会は、指令第 13 項において、兄弟たちの福音宣教者のミッションを、先行した研修会で浮かび上がった基準を再び取り上げ公認して、フランシスカンの観点から促進することを望みました。本会の現状についての学際的研究においても、一つの重要な集約が見られました。そこでは、まさに、兄弟たちの大部分が、霊的生活、兄弟的交わり、人々への開き、部分教会との協働、信徒やフランシスカン家族と共にするミッションを、より良く、そしてより多く配慮することを求めています²⁸。最後に、グレッチオでのセミナー（2013 年）は、報告書のもう一つの注意点を明確にしました。それは、すべての新しいあり方は、召命と養成への配慮、フランシスカン家族や信徒との関係を評価すべきことです。

2011 年にサッソーネ（ローマ）のカルメル会黙想の家で行われたセミナーは、その最終メッセージにおいて、生活とミッションの **新しいあり方** についてのいくつかのガイドラインを明確にすることを求めました。それは基本的特徴を概説することと、本会の諸構成団体に情報提供し、同様な「新しい」兄弟共同体を開設し、促進することです。要約として、以下が常に考慮に入れておくべき基本的特徴のリストです：

1. 「**祈りの生活とみことばに聞くことの首位性**」（毎日、又は毎週の「聖書朗読」；毎日一時間の個人的祈り；時課の典礼を「観想的に」朗唱すること）；
2. 「**兄弟的生活の明白なあかしを与える真正で深い兄弟的關係の促進**」（度々の修道院集会；インターネットや携帯電話、テレビな

（28）調査はサレジオ会のレナート・ミオン師によって 2012 年～2013 年に行われ、約 1,400 人の兄弟が調査対象として抽出されました。調査結果はその後、2009 年の総集会が求めたように、本会の現状についての学際的研究のための委員会の他に、総理事会と総本部組織による掘り下げのために提出されました。

どの通信手段の節度ある使用によって守られる、毎日の兄弟的対話)；

3. 「節度と質素、小ささとあかしによって特徴づけられる生活様式」(聖フランシスコが望んだような手仕事への忠実さ；可能ならば、人を雇うことなしに、修道院内の家事を分担し、運営に関わること；経済的自立への関与)；
4. 「人々、特に貧しい人々を歓迎し、わたしたちの生活を分かち合うこと」(人々との出会い)；
5. 「『諸国民への』、旅する福音宣教の (*itinerant*)、知られておらず、困難で危険を伴う地帯への存在、そしてより貧しい人々、苦しむ人々、疎外された人々の近くにあるという性格を持つ福音宣教的ミッション、国境地への特別な注意と福音宣教の新しい形態と『地域に根ざした』兄弟共同体」²⁹ (大修道院の回廊を出て、世界という回廊に向かう)；
6. 「部分教会との交わり」(主に、兄弟性と小ささのあかしで)；
7. 「信徒やフランシスカン家族との積極的な協働を進んで行う」(諸管区合同や国際的レベルで、さまざまな兄弟共同体での間、パレスチナのヨーロッパ人宣教者兄弟共同体と、福音宣教総事務局に関して)。

2.2. 調和をもたらす生活

(29) 小さき兄弟会 2009 年総集会、「指令」、n. 20 参照：「通常の福音宣教活動を放棄することなく、新たな試みが奨励されるべきである。新しい形の巡回型福音宣教と『地域に根ざした』兄弟共同体を通して、宣教活動と福音化の側面を促進するために、総理事会は、それぞれの管区長協議会の協力を得て、典型的にフランシスカン的な、兄弟たち及び信徒のための養成の試みを奨励すべきである」。

「新たな福音宣教は、信者に――生ぬるい、あるいは教えを実践しない者にも――、新しい信仰の喜びと、福音宣教の豊かさをもたらします。事実、その中心と本質は、つねに同一です。つまりそれは、キリストの死と復活において、ご自身の限りない愛を示された神です。[...] わたしたちが原点に立ち帰ろうとし、福音の本来の新鮮さを取り戻そうとするたびに、新しい手段が生み出され、現代世界にとって新たな意味を豊かに備えたことば、さまざまな表現形態、効果的なしるしなどの、創造的な方法が生み出されます。事実、あらゆる真の福音宣教は、つねに『新しい』のです」（「福音の喜び」、n. 11）。

新しいあり方 の生活とミッションを開始するための基礎となる基準が、兄弟たちをその基本的指標を調和させる毎日の課題を免除しないことを明らかにしました。各基準が互いに相関関係にあり、それぞれが調和的な相乗作用によって他に結ばれるのは、わたしたちにおいて働く聖霊の実りであるのは明かです。確かに、**新しいあり方** のさまざまな類型は、新しい兄弟共同体各自のそもそもの着想に従って、これらの要素のいずれかに強調点を置いています。

それゆえ、要するに、さまざま側面を組み合わせなければならない主要な諸課題は、表面上は互いに反対するもののように出現することができます。しかし、この矛盾を乗り越えるための困難の内にこそ、わたしたちのうちに個人としてまた共同体としての回心を働きかける、神のみ旨への絶えざる探求があります。2009 年総集会の最初の指令は、この調和を作る過程に光を投げかける助けとなっています。この指令はわたしたちに五つの「本会の優先課題」（神との生活、兄弟性、小ささ、福音宣教、養成）を生きるようミッションの見地から励まします。それゆえ、これはそれぞれの優先課題が他との関係を通して明らかになり、福音の告知に向けられた活動的な相互作用に導き、「『**内的に**』、そして**世界への開きの展望のうちに**」³⁰ 働きます。

(30) 小さき兄弟会 2009 年総集会、「指令」、n. 1: 「総集会は、総長と総理事会に、福音化するミッションを基調とし、世界への開かれた視点で、再度「優先事項」を提案してくれるように要請する。それは、それらの優先事項が、今後の生活とミッションの活性化において根本的な基準値であり続けるためである」。

- ＊ 最初の基準、神の首位性は、すべての **新しいあり方** の根底には、個人また共同体での祈り、**みことば** との毎日の対話において、主との生き生きとした接触があるのを明確に主張します。この土台は、どのような使徒的活動の前、どのような「行い」の前にも、弟子として「ある」ことを主張します。それゆえ、教皇フランシスコの原則に従い、観想生活とミッションを調和させる必要があります。教皇はわたしたちの存在が、常に「宣教する弟子」³¹ であるとししました。
- ＊ 真正で深い兄弟的關係の促進は、兄弟共同體の建設に自発的に時間を与えられることを要求します。それは、わたしたちが兄弟として、キリスト者として、また小さき兄弟として成長するための卓越した場なのです³²。このことから、以下の動きを調整する必要があります：兄弟的關係と主との人格的關係との間；兄弟共同體での生活と使徒的生活との間；兄弟たち同士の「内部的」(*ad intra*) 關係と「外部との」(*ad extra*) 接触の間。さらに、この他の動きにも触れておかなければなりません。權威の行使と兄弟的対話との間の実りある調和；わたしたちの個人的計画と兄弟共同體の計画との間；兄弟共同體での企画と地方教会の要請との間。國際的な構成による兄弟共同體では、兄弟間の關係において重要性を持つ、言語と文化の多様性が考えられなければなりません。
- ＊ 節度と質素さに特徴づけられる生活様式は、わたしたちを聖フランシスコの息子たちと認めさせるほど、より小さい者としてのわたしたちの誓願宣立を生きさせ、ことばによって告げる以前に、わたしたちの生活を通してあかしを立てることを許します。福音宣教者となる前に、わたしたちがまず福音宣教されなければなら

(31) 教皇フランシスコ、使徒的勸告「福音の喜び」(2013年11月24日)、n. 120：「わたしたちはもう自分たちを『弟子』や『宣教者』というよりも、『宣教する弟子』といいます」。

(32) 小さき兄弟会小さき兄弟会、「会憲」、第39条参照。

ないとの深い確信³³は、わたしたちが絶えざる回心への必要の自覚に深く根ざした謙虚さと自由に生きながら、常に弟子としての心を養います。より小さい者としてのわたしたちの生き方は、毎日、次のことを深めるよう促します：時間と労力の観点から、手仕事と、修道院内での仕事や宣教者としての伝道との間をどのように調和させるか；貧しい生活のための頑張り、生計維持のために金銭を得る必要との間；構造的なものは福音を明示すべきで、その障害となるべきではないとの確信を持ちながら、簡素な生活様式と、維持管理や人を雇う必要のある大きな建物に住むこととの間、このために、これらのことは、わたしたちの生活と共に常に回心する必要があります³⁴；暫定性に強く特徴づけられる旅する生活と、わたしたちが戻ったときに迎えてくれる修道院の快適な生活との間；フランシスカンの徹底性をもった召命と、管区への経済的依存との間に、どのように折り合いをつけるかです³⁵。

- * 兄弟共同体の注意を喚起するもう一つの側面は、わたしたちの修道院で提供される温かさと、兄弟的生活や外出の必要との間に折り合いをつけなければなりません。
- * さらに、部分教会との協働はいかなるものでも、それが **小さき兄弟** としてのわたしたちのカリスマを真に表し、教皇様の切望、「貧しい人々のための貧しき教会」³⁶ をわたしたち自身のものとするために、注意深く監視する必要があります。
- * 最後に、通信手段が便利であり、価値あるものだとは認めながらも、教会内そして世界全体における兄弟性に真に生きることができる

(33) 教皇パウロ 6 世、使徒的勧告「福音宣教」、n. 15：「教会は福音宣教者ですが、それにはまず教会自身が福音宣教されねばなりません」。

(34) 小さき兄弟会 2001 年総評議会、グアダラハラ（メキシコ）、n. 29：「画一性と、時と場所における特定の構造の過度の安定性は、福音的性格の欠如を示します」。

(35) 常に、「繁栄の文化はわたしたちの感覚を麻痺させる」（教皇フランシスコ、使徒的勧告「福音の喜び」、n. 54）ことを心に留めなければなりません。

(36) 教皇フランシスコ、使徒的勧告「福音の喜び」、n. 198。

ために、この分野においては注意深い紀律が必要であることも認めましょう。

2.3. 一つの生き方の多くの側面：

「新しいあり方」のさまざまな形

「奉獻生活会と使徒的生活会は、ご自分の貧しさでわたしたちを富ませようと、自ら貧しい者となられた方への同形化によって、常に、キリストである新しさへの預言者の声であり、生けるあかしとなってきました。愛に満ちたこの貧しさは、連帯と分かち合い、慈しみであり、節制や正義への希求、本質的なことを喜びとするうちに表されます。それは生命の真正な意味をぼやかす物質的偶像から守るためです。理論上の貧しさは必要とされません。むしろ、取るに足りない者、貧しい者、病人、子どもたちのうちにある、貧しいキリストの肉体に触れることで学ぶ貧しさなのです。

今日もなお、皆さんはキリストと世界のために、すべての貧しい人々への、そして、すべての物質的、倫理的、霊的に貧しい人々への前衛となり、わたしたちに神の御摂理への信頼を教える福音の論理を通して、いかなる形でのエゴイズムをも克服する模範となってください」。

（教皇フランシスコ、「奉獻・使徒的生活会省が企画した『人類と教会のミッションの奉仕のための、奉獻生活会・使徒的生活会が所有する教会財の管理』をテーマとする国際討論会出席者へのメッセージ」：2014年3月8～9日、教皇庁立アントニウム大学）。

神からの呼びかけと、教会と社会の必要との両方に応じることににおいて、**新しい兄弟共同体** はいろいろな様相を示します。そのすべては、神に始原をもち、かなりさまざまな時と場所の状況における兄弟たちの心に働き、次のように分類されます：

＊ 「伝統的な修道院におけるもの」、これは本会の多数の兄弟たちに、「新しいあり方」の特徴的な価値を知らせるための戦略的な形態です。これらの兄弟共同体は、一方で、簡素で地味な生活や兄弟的歓迎の場所を提供することで似通っていますが、他方で、その「固有」の特徴において多岐に分かれます：

- ・ 小ささへのあかしに強調点をもつ、簡素で基本的な生活様式。
- ・ 現代世界に通じる表現法や戦略を使用する特別な配慮。
- ・ 他の修道者や信徒の受容と協働。

- ・ 霊的支援を必要とする司祭や修道者の受容。
 - ・ 霊的・物的な困難にある人々の受容。
 - ・ 「移住者」の受容。
 - ・ 「宣教者」の新しい形態。
- ＊ 都市部の疎外された「地域に溶け込んだ兄弟共同体」。
- ＊ 田舎の「家屋（修道院ではなく）に居住する兄弟共同体」：単純な構造、肉体労働、自然との強いつながり。
- ＊ 「旅する福音宣教の (*itinerant*) 兄弟共同体」(期間の断続的なもの)：兄弟たちは一つの修道院又は家屋に住み、福音宣教活動に従事し、時折、旅する福音宣教に携わる³⁷。
- ＊ 「隠遁生活と旅する福音宣教を行う兄弟共同体」(観想生活の期間³⁸と、旅する福音宣教の期間を交互に持つ)。

これらの新しい形態のそれぞれは、より小さい者としての共同の関与に生きることを通して、常に神の御旨に十全に応えることを精力的に探求します。この兄弟共同体は、自分たちの固有の着想を抱きながら、生涯養成への忠実な努力によって、上記で見た七つの基本的特徴を結び合わせようとします。このような動きは、神や兄弟たちとの日々の出会いをもたらし、まさに、神の御摂理に自身を委ねるこの喜びに満ちた労苦において、新しさや実り豊かさが生じるのです。

(37) 小さき兄弟会総本部、「『時のしるし』から『しるしの時』へ：証言集」(*Dai Segni dei Tempi al Tempo dei Segni. Testimonianze*: 2002年)、n. 30: 「遍歴の兄弟共同体は宣教者的なものであり、祈りのうちに、金銭を持たず、固定した住居もなく、物乞いのうちに生きるものです」。

(38) 聖フランシスコの「隠遁所のために与えられた規則」に従って生きること。

3. 管区兄弟共同体との生き生きとした関係

「『自己から出て兄弟姉妹に向かうこと』の絶対的優先」
（「福音の喜び」、n. 179）。

3.1. 管区兄弟共同体における生活とミッションの刷新

「すべての者が、自分にとって快適な場所から出て行って、福音の光を必要としている隅に追いやられたすべての人に、それを届ける勇気をもつよう招かれているのです」（「福音の喜び」、n. 20）。

生活とミッションの **新しいあり方** に関わる兄弟共同体は、現代の教会において、主に従うことに風味と意義を与える「福音的新鮮さ」をもたらして、所属する管区にとっての生けるパン種となることができます。わたしたちのカリスマをより真正に生きたいという彼らの強い願望は、管区兄弟共同体全体にとっての模範となり、そこから三本の柱に中心を置く、修道生活の本質が理解されます。その三本の柱とは、神との生活、兄弟共同体における交わり、福音宣教者的ミッションです。「新しい」兄弟共同体は、このように、わたしたちのカリスマの中心にあり、互いに不可分に結びついているこれらの三つの次元を、すべての者にとって、より小さい者として日々生きるための刺激となります。

「神との生活」

神との生活は、すべての土台にあります。それは、わたしたち「小さき兄弟」の生活の中心であり、それは、わたしたちを養い、毎日の生活に兄弟的關係を深める力を与えてくれる滋養であり、それは、ミ

ッションの炎を燃やすエネルギーです。神との生き生きとした関係を生きるとは、以下の事柄を備えるのを意味します。

- ー 寛大で、優しく、開かれていて、協力的な心。それは、**キリストへの愛**によって、また自分たちの兄弟によって、特により苦しんでいる者との関係によって悲しませられるままにする心です。それは、自分自身と自分の兄弟たちとの平和な関係に明らかとなる、憐れみ深い神との愛に満ちた関係です。神から来る **真の平和** は、自分自身が既に和解した兄弟だけが伝えることができます。**アシジの精神** に従った文化、つまり「非暴力」で友好的、兄弟的關係における優しさ、赦しと被造物への敬意を持つ文化の促進によって、わたしたちは福音に従い、平和の種を播き、平和を構築する者となり得ます。
- ー 自分が確かに「つかみ取った物を手放し」、わたしたちの生命の支配者である主に「信頼を置く」能力。何人かの旅する兄弟たちが、何年もの間体験してきたことですが、彼らは、神の御摂理に全く信頼して、お金も持たず、またどこで寝るのかも前もって知らずに出発しました。彼らのミッションの度毎に、彼らは、主が彼らのすべての行く道の先々を進み、大きな善意をもって見守っておられるのを知ることができました。
- ー キリストに場所を作るために権力分散することを知り、ミッションを導くのが兄弟自身ではなく、実質的にキリスト御自身であることを認める能力。兄弟各自の能力はとても有用で、しばしば彼らが用いられますが、受けたその才能の創始者である方から目をそらさないように注意を払うことが重要です。それは、個人としてまた共同体としても、キリストがわたしたちの生活の主役であり、わたしたちは彼の霊の息吹によって生命を与えられているのを深く認めることを意味します。兄弟共同体と兄弟各自の生活の堅実さと一貫性の土台は、まずキリストにあり、兄弟たちのそれぞれの個人的能力や特質にあるものではありません。

- 一 **神のみことば** の黙想に規則的で誠実な、一層の注意を払うことと沈黙、聖体礼拝の時を持つこと、**みことば** の祈りに満ちた奉読に配慮し、福音宣教の濃密な源である典礼を熱心に生きること。
- 一 教会、聖人・聖女たち、とりわけ、聖母マリアへの愛。

「兄弟的生活」

「兄弟の賜物」を生きるとは、次のことを含みます・

- 一 謙虚さに満ちた他者との関係、たとえ良いものと思われても、自己の考えを何はともあれ正当化しようとししないこと、そして、それを他の兄弟に押しつけないこと。兄弟的精神は、成熟した相互の受容を前提としており、ある兄弟が他の兄弟を支配することに基づきません。関係性における謙遜は、主のためにより広い場を設け、自分とは異なる意見の兄弟を、より受容する態度のために、自己を譲歩させます。
- 一 共同体と兄弟各自の成長を促す、相互に耳を傾けること、生活の分かち合いと兄弟的コミュニケーションへのセンス。毎日の求めに与えられている、神の御国を探す作業を他者と協力して築く望み。自分自身とまた他者と、そして同様に、最も貧しい人々との、正しく健全な関係を気取らずに生きることに見出される喜び。気取らず率直な兄弟的矯正を与えそして受けることを通して、赦しの美しさを喜びをもって体験すること。
- 一 自分の兄弟共同体や管区そして本会の兄弟たちとの、また教会一般との交わり。権限が行使される場合や従順する状況にあるときの、権威者との健全でバランスのとれた関係。
- 一 兄弟が自分の兄弟共同体の外に留まる場合でも、彼に祈りや沈黙、レクリエーションや活動、談笑などの修道生活を送れるような仕組みの組織。

「福音宣教者としてのミッション」

福音宣教者としてのミッションは、常に兄弟共同体として遂行され、また主がわたしたちにお与えになった者として、他者のもとに赴き、告げるよう突き動かす内的な衝動として、次の事柄を伴います。

- わたしたちを活かしてくれるものについて、彼らが同じ泉から飲むために、この世におけるわたしたちの兄弟や姉妹にあかしする、燃え立つような願望；ミッションに出発するための実際のやる気；福音を告げる深い願望と、それを実践する呼びかけ。福音的大胆さがわたしたちをキリストに続く冒険に生きるよう励まします。
- 関係するさまざまな人物との実りある協働となるための、ミッションに先立つ適切な準備。相互的で好意的な、兄弟的援助に現れるキリストとの生き生きとした関係；
- 神の前で、また兄弟たちの好意的なまなざしの下での、わたしたちの日当の引き渡しと定期的な照合。熱心な活動の後での福音の分かち合いは、これを回復するための強烈な手段です；これは体験したことから少し離れること、主が語られることの受け入れに向けて、**神のみことば** について一緒に再集中することを許します。
- 神から来るものであり、またミッションにある兄弟に宿る平和と深い喜びと同様に、相互の関係における寛容の重要性。
- 観想、共同体生活、活動、研究と人間関係の間について、自己の時間の「良識のある」管理。このようにして、兄弟が誰のためにも時間を割けないほど活動によってあまりに「浸食」されることなく、またその対極として、時間の浪費や怠慢に陥ることのないようにする。

3.2. 生活から生まれる養成

「教会は強引な改宗活動によってではなく、『人を引きつける』ことによって成長するのです」（「福音の喜び」、n. 14）。

生活とミッションの **新しいあり方** は、生涯養成を絶えざる回心として生きようとする、生活様式としての深い霊的刷新を決意します³⁹。同時に、それらは福音宣教への新しい道の探求にあり、**神のみことば**と時のしるしに耳を傾けることにおいて、今日の人々により理解しやすい司牧活動に従事しながら、より小さい者の兄弟共同体としての新たな生活様式の具体化を探します。

このように、**新しいあり方** の特徴は、生涯養成にもまた初期養成にも、養成に特にふさわしいことが明白になります。まさにこれは、こうした兄弟共同体は、養成修道院で教えられた「原則」(ratio)を日々具体化するのを目指しているからです。ある意味で、これらの兄弟共同体は、「原則」(ratio)を具体的な「行動」(operatio)に移していると言えます。

近年では、**新しいあり方** が、多くの志願者や初期養成中の兄弟たちにとって、兄弟的体験と福音宣教の体験の場となってきました。そこで彼らは、人々、特に「社会の周辺部」にある人々と、直に接触する、より自然な存在の形を味わうことができました。

少なからぬ管区において、**新しいあり方** は、荘厳誓願を控えた重要な期間にある有期誓願者たちを受け入れ、彼らの人生における主からの召し出しを浮かび上がらせ、この段階でしばしば生じる困惑を乗

(39) 教皇ヨハネ・パウロ2世、使徒的勧告「奉獻生活」1996年3月25日、n. 69
参照：「養成過程は初期の段階に限られるものではありません。人間としての限界があるため、奉獻された人々は、人生のあらゆる状況の中で、キリストと同じ心を映し出す『新しい人』に完全に達したと断言することはできません。ですから、初期養成は生涯養成と密接に結び合わされなければなりません。これによって、すべての人に、日々の生活の中で養成される心構えがつくられるのです」。

り越える手助けをしました。このような手助けは、生活とミッションのプロジェクトを通して明確にされます；兄弟的絆を強め、深めること；祈りと献身の精神の質を高めること；真の生涯養成の動きにおいて、小ささの気取らない形態を生きること。

まさに **新しいあり方** と養成との密接な関係の理由から、**新しい** 兄弟共同体と養成学問担当管区事務局との間での成熟し、信頼に満ちた対話を手配することは、欠くことのできないものとなります。このような結び合わせは、管区運営に有益な影響をもたらします。

- まず、「**新しいあり方の兄弟共同体**」自体への影響。このように自分たちの場と役割を見出して、兄弟たちは全兄弟共同体の生涯養成の歩みに、本当に「溶け込んで」いると理解します⁴⁰。
- 養成修道院に住む者は、さらに **新しいあり方** のうちに自分たちの将来のいくつかの表現と、彼らが習得中のことの可能な実践方法を理解します；
- 管区のすべての兄弟たちは、**新しいあり方** のうちに、「**内部での**」(*ad intra*) と「**外部へ向かう**」(*ad extra*) 生活の間、知的側面と実践面の間、兄弟的生活の質と使徒的情熱との間に、バランスの取れた提案を見出すことができます；
- より根本的で活動的、柔軟で現実在即した生涯養成の新しい経験を促進します；
- このような兄弟共同体生活に惹かれて、召命のための同伴と識別の体験を望む若者たちを受け入れます。

(40) 教皇ヨハネ・パウロ2世、使徒的勧告「**奉獻生活**」1996年3月25日、n. 69
参照：「養成過程は初期の段階に限られるものではありません。人間としての限界があるため、奉獻された人々は、人生のあらゆる状況の中で、キリストと同じ心を映し出す『**新しい人**』に完全に達したと断言することはできません。ですから、初期養成は生涯養成と密接に結び合わされなければなりません。これによって、すべての人に、日々の生活の中で養成される心構えがつくられるのです」。

より具体的には、「初期養成」を視野に入れて、**新しいあり方** は以下のことを提案します：

- － 養成の各段階において、フランシスカン体験に参加する期間、
- － 『フランシスカン・イヤー』と、適宜な地域への溶け込みの受け入れと同伴、
- － 生活とミッションの適切な体験を通して、若い兄弟たちの適性と彼ら特有の召命を検証するのを助けます⁴¹。
- － 条件が見合うならば、**新しい** 兄弟共同体が養成修道院となり得ることも除外されるべきではありません。

「生涯養成」については、**新しいあり方** は以下のことを提供できます：

- － 生活から出発して生活に導く、真に根本的な生涯養成。重要ではあっても、今日化や司牧の仕事への準備の側面を超えていきます。
- － 兄弟たちの静修日や研究日の活性化。
- － 決断への「モラトリウム期間」(*moratorium*) や、サバティカル・イヤーの兄弟たちを受け入れ、同伴する；
- － 管区合同や国際的レベルに対しても、**新しいあり方** は、その特徴に従って、わたしたちの生活のいくつかの価値を分かち合うことを切望するか、動機付けや、フランシスカンの生活とミッションを取り戻す必要のある兄弟たちの目標となることができます。

(41) 「小さき兄弟会・フランシスカン養成綱領」2003 年に示されたものに沿って。

3.3. 「新しいあり方」に歩み出す：

同伴と検証への兄弟的歩みのためのガイドライン

「過ちを犯さないために歩み出さない者は、より重大な過ちを犯しています」
(教皇フランシスコ、「説教」サンタマルタ、2013年5月8日)

「出発点：プロジェクト」

なにがしかの新しい生き方を探して歩みを開始するには、具体的で魅力的、実現可能な提案なしには不可能です。その中心には「イエス・キリストの福音の生活」(*vita Evangelii Iesu Christi*) があるだけです。これこそ、進まなければならない歩みを導く「中心」で、すべてのものの真ん中に置かれ、関係する者すべてがそこに一致する必要があります。このプロジェクトが実施される状況と場所などの問題は、どれほど重要であるとしても、二次的なものに留まります。実際、いくつかの場合には、教区司教が、より適した場所の選定と具体的に可能な様式を定める上で、かなりの重要性を持ちました。いくつかの場合における識別の過程は、管区兄弟共同体内でも、また教区との間でも、さまざまな事前の話し合いを必要として、かなり長く詳細にわたるものとして行われることがあります。プロジェクトが、管区のプロジェクトとして引き受けられることが肝要で、管区はこれを支援し、特に管区会議の際には、少しずつの進歩を検証するよう求められています。

「新しいあり方の兄弟たち」

開始するためには、確信しており、決然として、何を望んでいるかを承知している人物が必要です。少なくとも3人か4人の、人間的に成熟していて、自律して補い合う者が求められます。それは、一個人

のプロジェクトではなく、各自のカリスマが発揮される兄弟共同体を対象としているからです。経験や出会い、省察や討論を通して熟してくる企画は、管区の統治機関とのオープンで緊密な対話から生まれるはずです。

「生活計画」

具体的な生活計画は、わたしたちの召命の三つの基本的価値の間にある、正しい階層とまとまりを確保するものでなければなりません：信仰生活、兄弟性、人々の間での存在（ミッション）。典礼的また個人的祈りの実際の枠組みは、内在化、落ち着き、時間そして誠実さを必要とします。ミッションはまずもってあかしから構成され、それは、わたしたちの生活様式によって明らかにされ、そして、わたしたちの元に来る者、あるいは誰に対してでも、誰に出会おうとも、わたしたちが受け入れる、開かれた態度に表されます。定期的でしばしばの兄弟的検証の機会、わたしたちのカリスマについてのこれらの基本的三要素間のバランスを確保するために必要です。

「権威者の役割」

促し、励まし、識別する責務は、管区会議と管区長たちにあります。関係する権威者は、兄弟たちの興味をかき立て、目覚めさせ、適任の人材を探し、自信をなくしたときや誤解のときに、彼らを助けることができ、またそうしなければなりません。管区長たちは、これらの兄弟たちを定期的に訪問し、近くから彼らに寄り添い、プロジェクトの成長を配慮します。さらに、管区長たちは伝統的な兄弟共同体と新しいあり方のものが、相互の接触を維持し、特に生涯養成や初期養成の各段階との良い関係を助長して、互いに助け合うよう配慮します。決定的に重要なのは、管区会議の際であり、特に最初の数年における「試行のため」(*ad experimentum*)のプロジェクトを検証するときです。

「教会との関係」

部分教会の一員であることを感じながら **小さき兄弟** として生き、あかしを立て、すべての者をフランシスカンの好意で受け入れながら、部分教会内において、司教や司祭、修道者や信徒との真正な交わりの歩みを示す。

結 び

全世界に遣わされて

聖霊は奉獻生活に「新しい答えを出し [...]、今日の状況に合った福音宣教の新しい計画を練り上げる」(『奉獻生活』、n. 73) よう招いています。これは明らかに、福音と現代の人々とを関係させる新しいあり方、新しいしるし、新しい媒介を見出すことを言っています。これは歴史や文化の外に留まらないための絶対的な要請です。歴史や文化は、当然のことながら、それぞれの歩みを持ち、絶え間なく変化します。強く神中心で、しかし、人間の深い必要を愛をもって受け入れる、実験的で「暫定的」な兄弟的仲介が必要です。わたしたちの兄弟共同体の生活様式自体が、あかしする力と告げ知らせる明瞭さとを取り戻さなければなりません。

本会には、わたしたちの社会との、この種の具体的な対話を敢えて行う用意を持ち、すべての人との交わりを怠ることなく、神への熱情と人々への共感に鼓舞されて、福音宣教に赴く用意のある多くの兄弟がいます。しかし、既存の構造を救おうとする悩みの心配から、どのように彼らを解放できるのでしょうか？ ある種の修道会の終焉への不安や、生き残りのための苦闘を、どのようにして乗り越えることができるのでしょうか？ ある特定の管区の一致を傷つけることなく、存在の新しいあり方に生きることができるのでしょうか？ 多くの兄弟や多くの管区の歩みを麻痺させている快適な「定住主義」を、どのようにして乗り越えることができるのでしょうか？ 教皇フランシスコは、わたしたちに次のように思い出させます：「繁栄の文化はわたしたちに麻酔をかけます」(『福音の喜び』、n. 54)。

暫定的なもの、可動的なもの、管区合同、国際的、カプチン会やコンベンツァル会との合同、他修道会との合同などの兄弟共同体は、既に生まれています。さらに、信徒との協働における、傾聴や自己への福音宣教などの福音宣教者性が結び合わされます。これらはエピソード

ド風の体験ですが、これらの新しい媒介を描くモザイク画の「はめ石」となり得ます。

W. ゲーテによれば、「ヨーロッパは聖地巡礼のうちに生まれ、そしてその母国語はキリスト教である」。フランシスカン運動もまた、ヨーロッパと世界全体を動く福音的機動力を持って生まれました。管区合同の兄弟共同体や国際的兄弟共同体を促進するなどして、何故この福音宣教上の敏捷さや大胆さを取り戻さないのでしょうか？ わたしたちは保存維持と生き残りの論理から、無私無欲の賜物の論理へと、「閉じ籠もった」待ちの戦略から、出会いの勇敢さへと移行するように呼ばれています。わたしたちは、それぞれの兄弟に対して、それぞれの兄弟共同体、管区そして本会内部で、「預言的性格と交わり」、新しさと継続性を取り戻すよう招かれています。生活と福音宣教の新しいあり方に挑むことは、これまで行ってきたことや現在行っていることを評価しないのではなく、ただ単に「新しい答えを出し〔....〕、今日の状況に合った福音宣教の新しい計画」（『奉獻生活』、n.73）を実行することなのです。福音宣教それぞれの形態の正当性を判断する基準は、新しいものも既存のものも、生き残りや便利さにではなく、わたしたちの生活様式が福音に対し、会則に対し、「福音の宣言と生活の一貫性」（『奉獻生活』、n.85）に対して、合致しているかどうかなのです。

すべての地方と文化は、大胆で預言者的なこれらの小さな兄弟共同体のフランシスカンたちに、刷新のしるしと基準点を見出す必要があります。教皇フランシスコの活力とメッセージの挑発的な現実性は、わたしたちにとり、刺激であり希望です。世界全体が彼のあかしによって再び目覚めさせられました。教皇様は、人々の間に兄弟性と小ささをもって生きるわたしたちのカリスマを、本当に信じています。しかし、わたしたちは本当に信じているのでしょうか？

兄弟 ジャコモ・ビニ

「聖霊がわたしたちのすべてに
使徒的情熱を与えてくださいますように。

そして、わたしたちに、周囲に不快感を与える恵み、
人間存在の周辺部にまで進む恵みを与えてくださいますように。

教会はこれを沢山、必要としています。

それゆえ、聖霊に
この使徒的熱意の恵みを願いましょう：

キリスト者に使徒的熱意を。

そしてもし、わたしたちが煩わしさを与えるならば、

主は祝福されますように！

前に進みなさい、主がパウロに言われるように：

『勇気を持ちなさい！』」

（教皇フランシスコ、「説教」サンタ・マルタ、
2013年5月16日）。

生活とミッションの「新しいあり方」へのフランシスカンの「真の幸い」

師父アッシジの聖フランシスコの夢

「自分の貧しさを知る人は幸いである。

天の国はその人たちのものである。

悲しむ人は幸いである。その人たちは慰められる。

柔和な人は幸いである。その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渴く人は幸いである。その人たちは満たされる。

憐れみ深い人は幸いである。その人たちは憐れみを受ける。

心の清い人は幸いである。その人たちは神を見る。

平和をもたらす人は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害されている人は幸いである。

天の国はその人たちのものである。

わたしのために人々があなた方をののしり、迫害し、

また、ありとあらゆる、いわれのない悪口をあなた方に浴びせると
き、あなた方は幸いである。喜び躍れ。

天におけるあなた方の報いは大きいからである。

あなた方より前の預言者たちも、同じように迫害されたのである」。

(マタイ 5 : 3～12) 。

「貧しさを持つ新しいあり方の兄弟共同体」は幸いです。その唯一の富は、典礼において賛美すべき神で、毎日慢心しきったエゴイズムに原因する罪による傷を治療し、憐れみのわざを実践し、耳を傾ける時間を持ち、隣人たちと聖体祭儀の食卓のパンを分かち合います...

「謙遜である新しいあり方の兄弟共同体」は幸いです。自分たちの欠点以外の完全性を持たず、それにより、すべての歩みに和解しなければならず、まさに限界のない愛をもって神が見るように、それぞれの兄弟の真理を見つめます。赦されたことを知る兄弟は赦します...

「喜びに満ちた新しいあり方の兄弟共同体」は幸いです。多くの不正を被っている人々と共に心から泣き、反抗することなく、常にそれぞれの心とそれぞれの家、すべての家族とすべての兄弟共同体で始められるべき新しくすばらしい御国のために働きます。なぜなら、イエスがわたしたちの兄弟となられたからです...

「憐れみ深い新しいあり方の兄弟共同体」は幸いです。その人たちは、地上の十字架に付けられた人々のうちに住み、野宿する貧しい人々と共にあるキリストに従い、社会の周辺部の人々を抱きしめます。交わりと共同体の種を播き、歴史から忘れられた犠牲者たちに救いを与える信頼の精神を生み出します...

「心の清さを持つ新しいあり方の兄弟共同体」は幸いです。その人たちは自らの奉獻を裏表なしに生き、見せかけの完全性を装うことなく、平凡さに甘んじることなく、人間的聖性と旅する神の民、つまり教会のすべての受洗者との連帯を求めます...

「平和をもたらす新しいあり方の兄弟共同体」は幸いです。その人たちは赦しながら赦しの種を播き、小さい者や身分の低い者を尊重しながら、新しい関係を生み出します。なぜなら神は、日々の十字架にあって、傷口から救いとして芽を出すパン種のように成長する御国の約束をもって、わたしたちを大いなる者とします...

「義を求める新しいあり方の兄弟共同体」は幸いです。その弱さをもって神のみことばの力強さをあかしします。「何の注釈もなしに」(*sine glossa*) みことばに聞くことは、従順による毎日の歩みを照らします。額に汗した労働の尊厳をもってパンを食べ、ご自分の約束を、時のしるしによる静かで途切れることのない雄弁さを通して実現する神への信仰を分かち合う喜びを得ることができます...

「迫害された新しいあり方の兄弟共同体」は幸いです。そこでは福音がその兄弟共同体にとり、そしてその歩みの途上で出会う者たちにとって良き便りとなります。常に巡礼者であり異邦人として、神以外に全能者はいないことをでき得る限りすべての被造物に告げ知らせます...

完全な喜びに喜び躍りなさい、兄弟たちよ。福音に適う生活の新しさに、会則とフランシスカンの生活に従って、新しい兄弟的あり方を与えながら：祈り、兄弟性、小ささ、宣教的で福音宣教的、生涯養成において... キリストの足跡に、その教会において従うために。わたしたちが奉仕において兄弟となるすべての人々と共に、姉妹となるすべての被造物と共に... 「福音の喜び」(*Evangelii gaudium*) と共に、すべての人と共に、創造の過ぎ越しの歌を高らかに歌うために。わが主をほめたたえよ、大いなる謙遜をもって、主に感謝しよう...!、キリスト・イエスの幸いな約束に全面的に信頼して：「喜び躍れ。天におけるあなた方の報いは大きいからである」。

幸いな御母、主のはしためであるマリアよ、フランシスカンの「新しいあり方」の永遠の星となってください。それが天におけるように地上においても、幸いなものとなるために。アーメン！

兄弟 ヴィダル・ロドリゲス・ロペス

養成学問総事務局長

「行って、告げなさい」：
小さき兄弟会における生活とミッションの
新しいあり方のガイドライン（２０１７年改訂版）

発行：小さき兄弟会・日本聖殉教者管区

〒106-0032 東京都港区六本木 4-2-3 9

聖ヨゼフ修道院

Tel: 03-3403-8088

Fax: 03-3401-3215
